

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

令和5年 6月 26日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 医学研究科 呼吸器外科学講座

職名・学年 大学院生 4年

氏 名 坂之上 一朗

助成の種類	令和5年度 ・ 国際研究集会発表助成			
研究集会名	第31回 ヨーロッパ胸部外科学会 学術集会			
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()			
発表題目	Clinical outcomes and cost analysis of organ delivery via public transportation in lung transplantation			
開催場所	イタリア・ミラノ			
渡航期間	令和5年6月4日 ～ 令和5年6月7日			
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版1枚程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()			
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000 円		
	使用した助成金額	350,000 円		
	返納すべき助成金額	0 円		
	助成金の使途内訳 (差し支えなければ要した経費全体をご記入ください)	費 目	金 額 (円)	
		航空運賃	295,000	
		宿泊費	102,000	
		滞在費		
学会参加費		25,000		
その他				
以上に助成金を充当				
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 近年の航空運賃やホテル代金、円安の煽りを受け、想定よりも費用がかさみ、最終的には自己負担分が出てしまいました。次年度以降の応募者にはこのあたり考慮頂けるとよいのではないかと感じました。			

肺移植と臓器搬送の未来についての議論

医学研究科 呼吸器外科学 博士課程4年 坂之上一朗

この度、京都大学教育研究振興財団助成事業の、国際研究集会発表助成を受け、イタリアのミラノで開催された第31回ヨーロッパ胸部外科学会に参加し、Clinical outcomes and cost analysis of organ delivery via public transportation in lung transplantation というタイトルで口演を行いました。

私の口演に先立ち、トロント大学、ウィーン大学、マドリード大学の移植プログラムの代表者から、肺保存を主題にして講演があり、昨今の世界における移植医療における肺保存のメインテーマとトピックについて学ぶ機会がありました。この中で、この数年におけるパラダイムシフトとして、肺保存中の至適温度管理についての話題を拝聴しました。肺移植医療が始まってから40年ほどが経過した現代において、これまで標準とされてきた冷保存、すなわち0-4°Cの保存は必ずしも最適な保存とは言えず、ミトコンドリア保存の観点から10°Cの保存の有用性について学びました。同保存方法は現在臨床試験が多施設で進行中であり今後の結果が待たれるところではあるものの、動物実験あるいは多施設研究に先立った pilot study では有用性が大いに期待されるという内容でした。

従来臓器冷保存は、移植医療における最大の問題である虚血時間による制限のため、欧米各国ではプライベートジェットやヘリコプターなど比較的成本を要する搬送手段に頼らざるを得ないという側面があります。我々の施設をはじめとした日本の肺移植施設は、コストバランスの観点から新幹線や民間の旅客機などの公共交通機関を用いて臓器搬送を行っており、コストが欧米の1/5~1/10に抑えられています。しかしながら公共交通機関を用いることで虚血時間が長くなるために移植後の成績が悪くなる可能性を考えていましたが、今回の我々の解析によると、コストを抑えながらも十分な臨床成績を残すことが出来ていることが明らかとなり、この点については聴衆に大いに興味を持って受け入れられました。

前述のレクチャーの内容と併せ、将来的には10°Cの肺保存と、公共交通機関あるいはFedExやDHLなどの民間の配送業者などとの連携の下で移植後の成績を保ちながらもコストを抑えた肺移植が実現可能と予測されるというコメントを聴衆から得ることが出来、大変有意義な発表となりました。肺移植に関連するコストは日本のみならず世界的にも増大傾向であり、その中でコスト削減への方策を示すことが出来たことも大いに意味があったと考えます。

最後になりましたが、このような貴重な機会に対し助成を頂きまして、誠にありがとうございました。関係各位の皆様にご心より感謝申し上げます。